

解答は別紙の解答欄に記入しなさい。

I 以下の文章を読み、空欄（ A ）～（ J ）に最も適切な語句を入れ、下線部（1）～（5）に関する各設問に答えなさい。

三田の夜空に星を見つけることは難しい。それほど、現代東京の夜は明るい。しかし、電灯発明以前の世界で、限られた灯火の下で暮らした人々は、夜の暗闇に文字通り包まれて暮らし、それゆえ頭上で燦然と輝く星々の存在は、彼らにとって極めて身近な存在であっただろう。また、案外忘れがちなのが、基本的に昼間にしか観測できない天体、すなわち₍₁₎太陽であり、人類のあらゆる活動の源とも呼べるこの天体は、主に古代を通じて世界各地で信仰の対象となった。

天文学は、古代文明の勃興とほぼ軌を一にして世界各地で誕生し、太陽、月、惑星そして無数の恒星等の動きを観察・記録した。その膨大な記録を基に製作されたのが暦であり、農作業や宗教祭儀をはじめとする季節毎の作業の目安となった。なかでも、月の満ち欠けの周期を基準とした太陰暦は代表的なものであるが、この暦では実際の季節とのずれが生じてしまう。そこで、古代メソポタミアやその他の地域では、この暦を基本としつつも、月の満ち欠けのみならず太陽の運行も加味し、閏月を挿入することで季節とのずれの問題を解消した暦である（ A ）が採用された。

時代は下り、ヘレニズム時代のアレクサンドリアでは、サモス島出身の（ B ）が地球の自転と公転を主張し、太陽中心説と地動説の立場をとった。しかし、ローマ時代に、同じくアレクサンドリアで活動し『天文学大全』を著した（ C ）は、地球こそが宇宙の中心であり、太陽や惑星が地球の周囲をまわっているという天動説を主張した。この学説は、カトリック教会の支持を背景に、その後千年以上にわたってカトリック諸国において支配的となった。

しかし、15世紀以降、天動説に対する反論の声ヨーロッパ各地で上がることとなる。その代表格は、ポーランドの聖職者コペルニクスであるが、彼以前にも15世紀のニコラウス＝クザヌスが、地球を宇宙の中心と見なすことに既に疑問を投げかけていた。コペルニクスによって理論化された地動説は、カトリック教会の強い反発に直面したが、少ないながらも支持者を得た。その一人がイタリアの哲学者（ D ）であり、彼は₍₂₎ドミニコ修道会の修道院で学ぶなかでコペルニクスの考えに強く影響を受け、地動説を信奉するようになった。しかし、その後彼は、宗教裁判で異端の宣告を受け、8年余りの投獄生活の後、1600年にローマで処刑されることになる。それでも、地動説擁護の流れは潰えることはなく、ガリレイは17世紀初めに地動説を主張した。その結果、彼も（ D ）と同様に宗教裁判に付され、結局自らの主張の撤回を迫られた上で自宅蟄居を命ぜられることとなった。他方、ドイツでもコペルニクスの地動説は支持者を得て、とりわけ（ E ）は惑星運行に関する「（ E ）の法則（または3法則）」を理論化して地動説の数理的な基礎を確立し、そして同説に基づく『コペルニクス天文学概要』を著した。

このように、ルネサンスを経て天文学は大きな飛躍を遂げ、太陽系システムの実態が徐々に明らかになってきた。しかし、それらの成果はあくまでも地上で為されたものであり、肉眼・望遠鏡による観察や机上での計算等によるものであった。ところで、人類は、天上の星々と地上の自分たちとの間に広がる空間をどのように認識していたのだろうか。プラトンの弟子または友人とされるエウドクソスは、天球と呼ばれる球面が玉ねぎ状に幾重にも重なりつつ地球を中心に回転しており、その一番外側の天球に恒星がのって一日に一周すると考えた。また上述のコペルニクスは、宇宙を有限の閉じた空間と考えたが、(D) はコペルニクスとは異なり、宇宙は無限に広がる空間であると考えた。いずれにせよ、地上、すなわち地球と、遙か彼方の太陽や惑星との間に広がる茫漠たる空間、つまり大空とその先に続く宇宙空間は、依然として人類が足を踏み入れることのできない領域であった。

それでも、飛行への憧れは早くから多くの人々の心を掴み、ついに飛行実現の大きな一歩となったのが、18世紀末のフランスのモンゴルフィエ兄弟による熱気球の初飛行の成功であった。気球は基本的には風任せの乗り物であり、移動手段としては適していなかったが、その気球に内燃機関を搭載して実際の飛行を可能としたのが飛行船であった。特に、19世紀末から20世紀初頭、皇帝(F) の統治下のドイツにおいて、ツェッペリンが開発した大型飛行船は大きな反響を呼び、ドイツと南北アメリカを結ぶ大西洋横断の定期運航も担うようになった。しかし、飛行船はその空気抵抗の大きさゆえに高速飛行には不向きであった。その欠点を補い、結果的に航空の主役となったのが、私たちにも馴染み深い動力飛行機（以下、「飛行機」と呼ぶ）であり、アメリカのオハイオ州で自転車工房を営んでいた(G) が、1903年に有人による初飛行を遂げた時からその文字通りの飛躍が始まった。

こうした飛行技術の進展は、一見すると人類の大空に対する純粋な憧れや探求心によって育まれたように思えるが、しかし戦争という現実的動機や需要によって強く後押しされていたことも否めない。事実、⁽³⁾気球は発明から程なくして偵察目的のためにフランス軍に採用された。また、ツェッペリンの飛行船も、開発から間もなくして始まった⁽⁴⁾第一次世界大戦で、ドイツ軍機として多数の機体が使用され、イギリス等に対する爆撃に従事している。そして、それは飛行機についても同様であった。(G) は研究を続けるためにアメリカ軍と契約を結ぶことを望み、その結果、初飛行から数年後には軍が(G) から飛行機を購入している。当初は主に木材と布で作られていた飛行機の機体は、戦間期と第二次世界大戦を経て、その大部分が金属製となり、また速度、航続力、輸送能力も大幅に改善された。こうした発展は、戦後の民間航空の本格的な興隆につながっており、現代に生きる我々はその恩恵を大いに享受している。しかしその一方で、性能向上を背景に、第一次世界大戦中には後の戦略爆撃の嚆矢ともいえるべき作戦が実施され、第二次世界大戦では日・独・米・英といった各国が苛烈な戦略爆撃を行った。例えば、日本軍による中国の重慶に対する爆撃や、連合国側による日本の東京やドイツの(H) に対する夜間無差別爆撃が挙げられる。(H) は、ザクセン選帝侯領を前身とするザクセン王国の首都であり、現代でもザクセン州の州都であるが、1945年2月のこの空襲によって壊滅的な被害を受けた。航空の発展によって多くの民間人が犠牲になったことも、また事実

なのである。

飛行という観点では、この第二次世界大戦はもう一つの意味で大きな転換期となった。それは、ロケット技術の進展である。ドイツ軍は、一種のミサイル兵器である V-2 ロケットでロンドン等を攻撃したが、戦後になるとその技術は旧連合国側にもたらされ、それを基にとりわけアメリカとソ連は、自らの軍事的優位や国威発揚のために、ミサイルを含むロケット技術のさらなる発展にしのぎを削った。その結果、両国は、有効射程距離が5500キロメートルを超え、核弾頭を装着可能な陸上発射型の（ I ）を開発し、1950年代後半に相次いで実戦配備したことで、互いの国土を核攻撃の射程内に収めることとなった。一方、宇宙開発においても米ソ両国は激しい競争を繰り広げ、⁽⁵⁾1957年にソ連がいち早く世界初の人工衛星スプートニク 1 号の打ち上げに成功すると、アメリカは1969年に打ち上げられた（ J ）によって初の有人月面着陸に成功した。しかし冷戦終結後、アメリカとロシアは、日本や欧州諸国等とも協力して国際宇宙ステーションを建設し、宇宙空間で長期滞在しながら研究・実験・観測を行うことが可能となったのである。

設問（１）前 1 世紀から後 6 世紀にかけてメキシコ高原に成立した文明で、黒曜石製品の貿易で栄える一方、その中心都市では巨大な「太陽のピラミッド」が建設された文明の名称を記しなさい。

設問（２）ドミニコ修道会と並ぶ代表的な托鉢修道会の一つで、1209年、アッシジに創設された修道会の名称を記しなさい。

設問（３）フランス軍によって初の気球部隊が編成された1794年 4 月のフランスは、ロベスピエールによる恐怖政治の只中にあったが、1792年に司法大臣に就任し、その後山岳派右派を主導して、恐怖政治の強化に反対した結果、ロベスピエールと対立して1794年 4 月に処刑された人物の名前を記しなさい。

設問（４）第一次世界大戦にアメリカが参戦した際の大統領はウッドロー＝ウィルソンであったが、アメリカ的理念を他国にも広め、それによってその国にも資本主義・民主主義体制を確立することを目指した彼の外交は何と呼ばれたか、その呼称を記しなさい。

設問（５）ソ連が世界初の人工衛星の打ち上げに成功した際のソ連共産党第一書記で、コミンフォルムの解散を主導した人物の名前を記しなさい。

Ⅱ 以下の文章を読み、空欄（ A ）～（ J ）に最も適切な語句を入れ、下線部（ 1 ）～（ 5 ）に関する各設問に答えなさい。

オスマン帝国は、13世紀末頃にアナトリア北西部で成立したトルコ系の地方政権を起源とする。14世紀半ばにバルカン半島への進出を本格化させ、1396年にはニコボリスの戦いでハンガリー王ジギスムントの率いる連合軍を撃破した。15世紀初頭、アナトリア中部のアンカラでティムール朝軍に大敗し、第4代スルタンである（ A ）が捕虜となったことで、帝国は統一を失い、存亡の危機に陥った。しかし、同世紀半ばまでに体制を立て直し、以後、ヨーロッパやアジアの各地に勢力を拡大させた。

オスマン帝国の第7代スルタンであるメフメト2世は、1453年にコンスタンティノープルを攻略し、ビザンツ帝国を滅ぼした。7世紀以来のムスリム勢力の宿願を果たし、「征服者」と称されたこのスルタンは、コンスタンティノープルを帝国の新たな首都に定め、その開発に努めた。ハギア＝ソフィア聖堂をモスクに改装し、ヨーロッパ勢力の反撃に備えて城壁を修復したほか、ボスフォラス海峡を臨む高台に新たな宮殿を建てた。この宮殿は、国政の中枢として機能し、後に（ B ）宮殿と呼ばれるようになる。（ B ）はトルコ語で「大砲門」を意味する。さらに、メフメト2世は都市に水道を引き、巨大な市場や商館、隊商宿、公衆浴場などを建て、住民の生活に必要な環境を整備した。また、かつてビザンツ皇帝の墓所として機能した聖使徒教会の跡地に壮大なファーティフ＝モスクを建設し、学院、図書館、病院、給食施設などもその周囲に併設した。この学院は、オスマン帝国の最高学府に位置づけられ、⁽¹⁾イスラーム世界の学問の発達に大きな役割を果たした。給食施設では、これらの施設の職員や学院の学生、都市を訪れた者や貧しい者たちに対して、1日に2度の食事が無償で提供された。ムスリムにとっての断食の月であるイスラーム暦第9番目の月には、特別な食事が用意された。この月をアラビア語で（ C ）と呼ぶ。

オスマン帝国による征服以降、次第にイスタンブルとも呼ばれるようになるこの都市は、メフメト2世による開発を基礎として、オスマン帝国の政治・経済・文化の中心となった。そして、マムルーク朝の首都であるエジプトのカイロや、ティムール朝の首都であった中央アジアの（ D ）を凌ぐほどのイスラーム世界の一大都市に発展するのである。（ D ）は、13世紀前半にモンゴル軍の攻撃を受けて荒廃したが、1370年に政権を握ったティムールが首都として再建したことで、以後、繁栄を取り戻した。

コンスタンティノープルを征服した後、メフメト2世はバルカン半島やアナトリア、黒海沿岸部などの各地に遠征を繰り返した。西方では、ハンガリー王国が防衛上の拠点であるベオグラードの防御を固めつつあった。ハンガリー王国は、10世紀末にマジャール人がドナウ川中流の（ E ）平原に建てた王国である。メフメト2世は、バルカン半島以北への門戸を開くべく、ベオグラードを攻囲したが、フニャディ＝ヤーノシュの率いるハンガリー軍に退けられた。しかしその一方で、バルカン半島

ではセルビアやボスニアなどを支配下に収め、アナトリアでは黒海沿岸の諸都市を制圧した後、ビザンツ皇族の流れを汲むトレビゾンド帝国を滅ぼした。1204年の⁽²⁾第4回十字軍によるコンスタンティノープルの征服を受けて成立したこの帝国は、政略結婚を重ねて周辺諸国との友好関係を保ちつつ、イラン・アナトリア・黒海を結ぶ交易路の要衝を支配し、メフメト2世によって滅ぼされるまで約250年にわたって存続した。アナトリア東部では、トルコ系遊牧民の部族連合であるアクコユンルが、君主ウズン＝ハサンのもとで勢力を拡大させていた。アクコユンルが次第にアナトリア中部への干渉を強めると、メフメト2世はアナトリア東部に進軍してアクコユンル軍を破り、アナトリア中部の支配を確立した。このときまでに⁽³⁾アナトリア中南部の重要都市コンヤもオスマン帝国の支配下に入った。黒海北岸では、クリミア半島の貿易港であるカフファをジェノヴァから奪取したほか、キプチャク＝ハン国の継承国家であるクリム＝ハン国を従属させた。

こうしてメフメト2世の治世には、バルカン半島とアナトリアのほぼ全域がオスマン帝国によって統一され、黒海は事実上、オスマン帝国の内海となった。その結果、オスマン帝国は、東欧のハンガリー王国や、エジプト・シリアを治めるマムルーク朝と対峙することとなった。東方では、ウズン＝ハサンを失ったアクコユンルが衰退すると、サファヴィー教団の教主である（ F ）が、1501年にタブリーズを占領し、サファヴィー朝を開いた。東方貿易によって繁栄し、「（ G ）海の女王」と称されたヴェネツィアは、オスマン帝国の勢力拡大に対抗し、各地でオスマン帝国と衝突した。

メフメト2世の征服活動を支えたのは強力な軍隊であった。その軍隊は、⁽⁴⁾イエニチェリを中心とするスルタン直属の常備軍団と、（ H ）と呼ばれる騎士の軍団を柱とする。トルコ語で「新しい兵士」を意味するイエニチェリは、最新の武器で武装した常備歩兵である。一糸乱れずに行動する彼らは、敵対する国々に大きな脅威を与えた。騎士である（ H ）は、軍事奉仕の義務を負い、その俸給として農村などからの徴税権を与えられた。戦時には、与えられた徴税権の額に応じて武器や従者などを整え、従軍した。また、農村などで税を徴収する立場にあった彼らは、オスマン帝国の地方統治にも重要な役割を果たした。

オスマン帝国によるバルカン半島とアナトリアの政治的統一は、東地中海交易の発展をもたらした。首都イスタンブルには、アナトリアの絹織物や毛織物、北方の毛皮、バルカン半島の穀物や家畜、ヨーロッパの毛織物、東南アジアの香辛料、インドの綿織物など、各地から多様な商品が集まった。オスマン帝国初期の首都であるアナトリア北西部のブルサは、イランから絹を運ぶ隊商の終着地として栄えた。そこにはイタリア諸都市のほか、バフマニー朝下のインドからも商人たちが訪れた。バフマニー朝は、デリー＝スルタン朝の第3の王朝である（ I ）朝から14世紀半ばに独立したイスラーム王朝である。他方、バルカン半島では、イスタンブルから（ G ）海沿岸に至る陸上交易が活発になり、各地で隊商宿が建設された。

16世紀初頭にオスマン帝国がシリアとエジプトを領有すると、イスタンブルの宮廷にはエジプトの穀物や砂糖、東南アジアの香辛料、⁽⁵⁾西アフリカの金などがエジプトから船で運ばれるようになり、

イスタンブルとエジプトを結ぶ海路の重要性は一段と高まった。この海路の安全を確保するため、第10代スルタンであるスレイマン1世は、ロードス島に艦隊を派遣した。また、第11代スルタンであり、スレイマン1世の息子である（ J ）の治世には、ヴェネツィア領であったキプロス島の征服を果たした。この事件を契機として、ヴェネツィア・スペイン・ローマ教皇などの連合艦隊が組織され、ギリシア中西部のレパント沖でオスマン帝国艦隊と対戦することになるのである。

設問（1）9世紀前半、翻訳・研究機関である「知恵の館（バイト＝アルヒクマ）」をバグダードに設立し、ギリシア語文献のアラビア語への翻訳を推進した、アッバース朝第7代カリフの名前を記しなさい。

設問（2）第4回十字軍を提唱したローマ教皇の名前を記しなさい。

設問（3）11世紀後半にアナトリアで成立し、ニケーアやコンヤを都としてアナトリアのトルコ化・イスラーム化に大きな役割を果たした、トルコ系イスラーム王朝の名称を記しなさい。

設問（4）オスマン帝国の第30代スルタンであるマフムト2世がイエニチェリ軍団を廃止したのは何年か、アラビア数字（算用数字）で記しなさい。

設問（5）14世紀前半に「黄金の国」マリ王国の最盛期を現出し、大量の金を持参してメッカ巡礼を行ったと伝えられる同王国の王の名前を記しなさい。

Ⅲ 以下の文章を読み、空欄（ A ）～（ J ）に最も適切な語句やアラビア数字（算用数字）を記入しなさい。

人間は集団を形成し、その集団はしばしば国家と呼ばれるようなものに拡張される。国家が誰によって統治されるか、その長が統治する権威をどのようにして調達するかは、歴史を通じて問題でありつづけてきた。前12世紀までは古代イスラエルの人々は王を持たず、断続的に現れた「士師」と呼ばれる長たちによって治められていた。しかし、人々は「王」による統治を求めるようになったと旧約聖書は伝える。最高の智者と称えられ前10世紀にヤハウェの神殿建設を行ったイスラエル王国第3代の（ A ）王の死後、王国は二国に分裂する。ただし、いずれの国でも王政は存続した。

他方、古代ギリシアのアテネでは、前8世紀には貴族政治が行われていた。前594年に、当時の執政官である（ B ）は市民を財産によって4等級に分け、等級に応じて参政権を定める改革を行った。これにより平民の一部が政治参加できるようになった。その後、非合法の独裁者である僭主による僭主政治の時期を経て、直接民主政が行われるようになる。古代ローマでも、建国にまつわる伝承は、エトルリア人の第7代の王を前509年に追放して共和政を宣言したと伝える。しかし、前2世紀半ばからの「内乱の一世紀」を経て、ローマの政体は事実上の帝政へと移行する。とはいえ、（ C ）帝よりも前の皇帝たちは、「市民のなかの第一人者」を意味するプリンケプスという称号にちなむ元首政のもとで、形式上の共和政を継続したのだった。

ローマ帝国下のイスラエルで始まったキリスト教は帝国内各地に広がっていった。（ C ）帝などによる迫害もあったが、4世紀後半には国教化されるに至った。五本山と呼ばれるようになった帝国内の5つの重要な教会のうち、4世紀末に東西に二分割された帝国の西半分には位置していたのはローマの教会だけだった。ローマは使徒ペテロとパウロが殉教した地とされ、ローマ教会の指導者は、使徒ペテロの後継者として教皇と呼ばれた。ローマ教会は、階層制組織を発展させていく。その組織は、一般の信者、彼らにミサや洗礼、結婚式などを行う司祭、司祭の任命や指導を行う（ D ）、さらに（ D ）区を複数統括する大（ D ）、そして頂点に教皇を戴く、ピラミッド型をなした。

4世紀以降、ローマ帝国内に大移動を行ったゲルマン人は、いくつもの国家を興したが、その多くは短期間で消滅した。しかし、5世紀にフランク王国を建国したクローヴィスは、（ E ）派のキリスト教に改宗してローマ教会の支持を取りつけた。この王国は、分割相続と王位争いに悩まされつつも長期にわたって存続する。8世紀にカロリング朝の時代に栄えるが、分割相続で9世紀に三分割された結果としてできた三王国は、のちのフランス、ドイツ、イタリアの基となる。962年のオットー1世の戴冠を起源とする神聖ローマ皇帝については、13世紀の大空位時代を経て、皇帝カール4世が（ F ）年に金印勅書を発布する。それによって、聖俗の七選帝侯による多数決制が定められ、そうした選出方法が19世紀初めの帝国解体まで効力をもった。

16世紀から18世紀のヨーロッパでは、王権神授説を理論的支柱として、王権を絶対視する政治体制

が多く見られた。16世紀後半に、宗教改革後の宗教戦争の最中にあったフランスでは、思想家の（ G ）が主著『国家論』のなかで、主権という概念をはじめて定式化し、この絶対的権力を有する王権が平和と秩序を回復できると論じた。ブルボン朝の王たちは、17世紀以降フランス革命の直前まで、身分制議会である全国三部会の招集を停止していた。イングランドでも、チャールズ1世は、「権利の請願」を提出して王権を制限しようとする議会を1629年に解散し、以後11年間にわたり議会をひらかない専制政治を行った。しかし、彼はピューリタン革命で議会派によって処刑されることになる。大陸ヨーロッパでは、啓蒙の担い手たる市民層が十分に育っていなかった地域において、君主が上から啓蒙改革を進めていく啓蒙専制主義の体制が目立った。その代表的な国が、フリードリヒ2世のもとで国力を増強したプロイセンである。1190年にアッコで組織された（ H ）は、13世紀以降、活動の場をはるか北のエルベ川以東に移し、東方植民の中核を担い、広大な所領を生み出した。この（ H ）領が、16世紀の宗教改革によってプロイセン公国となり、18世紀初頭に王国に昇格したのである。

18世紀後半のアメリカやフランスでの政治的な革命は、世界各地に衝撃をあたえた。例えば、ラテンアメリカでは、1791年の黒人奴隷の反乱に端を発したフランスからの独立運動によって、1804年に黒人共和国として（ I ）が独立した。これらの政治変革とそれに対する反動は、各地で幾度も繰り返されることになる。1814年からその翌年にかけて、フランス革命とナポレオン戦争後のヨーロッパ秩序再建を企図して、ウィーン会議が開催された。そこでは、従来からの君主制に立脚する列強を中心に、自由主義・国民主義運動の抑圧と、列強間の勢力均衡が図られた。それによって成立したウィーン体制は、フランスの二月革命の影響でヨーロッパ各地で起こった1848年革命によって崩壊する。オーストリア領内のハンガリーでは、この革命によってハンガリー内閣の初代蔵相となった（ J ）を中心にして、ナショナリストが独立や農奴制廃止を求めて反乱したものの、鎮圧される。1848年革命の震源となった当のフランスでは、二月革命のわずか4年後に、第二帝政が国民投票によって成立するのである。

Ⅳ 以下の文章を読み、空欄（ A ）～（ J ）に最も適切な語句を記入しなさい。

第二次世界大戦後の中国では、国民党の一党独裁体制を打破して、憲政を実施することが焦点になった。1945年、国民党・共産党両党の会談が重慶で開かれて、10月10日に蒋介石と毛沢東が双十協定を結び、内戦の回避や（ A ）の開催を約束した。1946年に重慶で（ A ）が開催され、国共両党を含めた主要な政治勢力が戦後の中国のあり方を議論した。しかし、同年には国共内戦が本格化した。内戦期の国民党は、党幹部の腐敗や経済的な混乱で大衆の支持を失う一方、共産党は農村で（ B ）を実施して支持を広げていく。（ B ）によって地主の土地が再分配され、自作農が生産意欲を高めた。ただし、中国ではその後の農業の集団化によって、農民の土地所有権は失われた。

1949年10月、北京を首都とする中華人民共和国が建国されて、主席には毛沢東、首相には周恩来が就任した。中華人民共和国は、建国直後にソ連・東欧諸国・インドなどによって承認された。西側の主要国では、イギリスが1950年に中華人民共和国を承認した。建国後間もない中華人民共和国は、1950年6月に勃発した朝鮮戦争に、大きな影響を受けることになる。アメリカを中心とする国連軍が韓国を支援して中国国境近くまで接近すると、中国は北朝鮮を支援して人民義勇軍を派遣した。朝鮮半島ではその後、北緯38度線付近を挟んで攻防が続いたが、1953年に（ C ）で開かれた休戦会談において朝鮮戦争の休戦協定が成立した。

他方、中華人民共和国は、1951年に人民解放軍をチベットに派遣して進駐させた。自治をめぐる中央政府とチベットが対立し、1959年にラサで反乱が起こると、人民解放軍がこれを鎮圧した。この時、チベットの政治・宗教の最高責任者であった（ D ）はインドへと亡命し、それを契機に中印国境では武力衝突が起こった。なお、（ D ）は、1989年にノーベル平和賞を受賞している。また、1955年には、東トルキスタンを中心とする地域にウルムチを区都とする（ E ）自治区が成立した。（ E ）自治区や1965年に成立したチベット自治区では、その後の経済発展にともなって漢族の流入が増加すると、民族対立が激化して暴動も発生した。

東南アジアに目を転じると、ベトナム戦争は、第二次世界大戦後における最大級の戦争であった。南ベトナムが共産側となれば周辺諸国も共産化すると考えたアメリカ合衆国のジョンソン大統領は、1964年の（ F ）を口実に、本格的な軍事介入を行った。アメリカの駆逐艦が北ベトナムの魚雷艇の攻撃を受けて反撃したと発表されたが、この（ F ）はのちにアメリカのでっちあげだったことが判明した。アメリカは、1965年以降、北ベトナムに大規模な爆撃を行い、大軍をベトナムに派遣した。これに対してソ連と中国は、北ベトナムと南ベトナム解放民族戦線に大規模な軍事・経済援助を行った。

1969年にアメリカ合衆国の大統領に就任したニクソンは、アジアでのアメリカの軍事介入を縮小することを提唱した。1971年には、（ G ）が大統領補佐官として秘密裡に訪中して、米中和解の足がかりをつくると、翌年にニクソン大統領が訪中し、毛沢東とのあいだで関係正常化に合意した。

また、1973年にはベトナム（パリ）和平協定が成立し、ニクソン大統領はアメリカ軍の南ベトナムからの撤退を実現させた。同年、（ G ）はベトナム和平の功績で、ノーベル平和賞を受賞した。

ベトナムでは、1976年に南北を統一したベトナム社会主義共和国が成立した。その頃、カンボジアでは親中国の（ H ）を首相とする民主カンプチア政府が成立した。しかし、反中国のベトナムとの間で国境問題が起こり、ベトナムが侵入したカンボジアでは、1979年にヘン＝サムリン政権が成立した。（ H ）派は中国の支援を受けながらゲリラ戦を展開し、人民解放軍はベトナムに侵攻して中越戦争が起こった。

中国では、1966年、毛沢東が実権奪取のためにプロレタリア文化大革命を発動し、大衆運動を利用した政治権力闘争に中国全土をまきこんでいった。しかし、1976年に周恩来と毛沢東があいついで死去すると、首相である（ I ）が、文化大革命を推進していた「四人組」を逮捕した。そして、1977年に文化大革命は終了を告げた。文化大革命終結後、実権を握った鄧小平は、経済建設を重視して、農業・工業・国防・科学技術の「四つの現代化」を推進し、改革・開放政策を実施した。ところが、1989年、学生や青年労働者などによる民主化要求運動がおこり、人民解放軍がこれを鎮圧した。この天安門事件によって、中国は国際的にきびしい批判を受けた。とはいえ、その後も改革・開放政策は推進されて、中国はめざましい経済発展を実現していく。

さらに、1997年にはイギリスから香港が、1999年にはポルトガルからマカオが中国に返還されて、これらの地域には（ J ）制度が適用された。それによって、特別行政区となった香港とマカオでは、社会主義の中国に返還された後も資本主義が存続した。